

戦国期の都留郡内と小山田氏の支配

鎌倉幕府の成立から室町幕府の滅亡までのおよそ四百年間(十二世紀末〜十六世紀末)がわが国の中世であるが、その中世末期が、いわゆる戦国時代(応仁の乱に始まり群雄割拠して国内が麻の如く乱れ、豊臣秀吉の天下統一までの約百年間)である。

郡内の呼び名について

はじめに、都留郡域の地域的呼称であった「郡内」の呼び名について、少し検討しておきたい。通説では、郡内の称は甲府盆地を「国中」、盆地南部の富士川両岸域を「河内」と、甲斐国内が武田・穴山・小山田の三氏によって分割支配されていた戦国期からの地域呼称であるといわれている。しかしその説は、

『甲斐国志』が見通しとして述べていたもので、その後も具体的には検討されることがなかった。果たして「郡内」はいつ頃から使われ始めたのであろうか。

江戸時代の初頭頃までは甲斐国には、当時の行政区分の郡とは別に「九筋二領」という区分法があった。九筋とは逸見・武川・中郡・西郡・北山・大石和・小石和・万力・栗原であり、二領とは河内領・郡内領である。

「郡内」の称の初見は、天文四年(一五三五)の『快元僧都記』の記事であって、ほかには、当地方の戦国期の代表的な年代記である『勝山記』に、弘治二年(一五五六)と永禄四年(一五六一)の二カ所だけで、他の部分は圧倒的に



「都留郡」の用例の方が多い。他に天正七年(一五七九)の小山田信茂『吉田町諸役免状』を入れても四例と少なく、戦国期に「都留郡」以上に「郡内」が呼称されていたとは思われない。

小山田氏の都留郡入部

承久乱(一一二一)の時の東山道軍の従軍武士の中に小山田太郎の名があり明らかに甲斐・信濃の軍団の一翼を担っている実力者として扱われている。小山田太郎は、

元久二年(一一〇五)の畠山重忠の謀反や建保元年(一二二三)の和田乱の敗軍の所属軍団の一つであった平姓秩父党の中に、小山田有重の三人の息子(稲毛三郎・榛谷四郎・小山田五郎行平)の名があり、都留郡小山田氏の始まりについて、『甲斐国志』『小山田氏略系図』等によれば、この五郎行平が畠山乱時に山峡に逃れて都留郡に入り開祖となった。小山田太郎は行平の子である、というのが通説である。はっきりしているのは承久乱時に甲斐国の郡内地方に、なんらかの諸職を持つ独立した武士として小山田太郎が入部していたことである。そしてその地は多分、

古代郡郷制の多良(田原)郷域と推定される。郡内地方の場合、最大の生産地帯の一つは多良郷であったと推定されるが、小山田氏は先ずここを根拠とし、後々ずっとここを本拠地としているのである。即ち、

畠山乱の一件とは無関係にすでに武蔵の小山田荘(現町田市)を本拠とする武士団の一部が独立した御家人として都留郡内に入部しており、その根拠としたものは郷地頭であった。時期的にみても承久乱に独立した武士として甲斐国の守護の催促に応じて出陣したものと思われる小山田太郎を、都留郡小山田氏の起点として掲げたい。

―都留市史「通史編」より―

第64回町別野球大会

桂町四連覇!!

今年で六十四回を迎えた伝統のある町別野球大会は、市内各地の精鋭二十九チームの参加により、八月十一日、十八日、二十五日、九月一日の四日間にあわって開催されました。

今年は四日間、好天に恵まれ選手たちの白熱したプレーと、かけつけた方々の熱気ある応援が夏を感じさせてくれました。

決勝戦のカードは大会四連覇をねらう桂町チームと接戦を勝ちぬき初めて決勝進出を果たした古川渡チームとの対戦となりました。試合序盤から桂町チームが多岐な攻撃で大量点を取り、古川渡チームもねばりを見せ健闘しましたが、桂町チームが二度目の大会四連覇を達成しました。



成績・各賞は次のとおりです。

優勝 桂町チーム

準優勝 古川渡チーム

第三位 月見ヶ丘チーム

下大幡チーム

最優秀選手賞 佐藤輝正(桂町)

最優秀投手賞 三沢和也(桂町)

打撃賞 平井 武(桂町)

敢闘賞 阪本和洋(古川渡)

第64回都留市町別野球大会結果

